平成 27 年度 第２回　稲城市海外姉妹都市提携検討市民会議
議事録　【要点記録】

【開催日時】平成 27 年 11 月 25 日（水）　午後７時から８時 55 分
【会　　場】消防署３階　講堂
【出 席 者】■委員；出席者 13 人

・ 稲城市自治会連合会（川島　幹雄氏）
・ 稲城市農業委員会（松本　一宏氏）
・ 稲城市商工会（奈良部　義彦氏）
・ 稲城市消防団（城所　達也氏）
・ 稲城市体育協会（中家　敬士氏）
・ 教育関係及び稲城市三曲協会（粟井　洋子氏）
・ 稲城市芸術文化団体連合会（安東　道正氏）
・ 稲城市学校 PTA 連合会（高橋　やよい氏）
・ 稲城国際交流の会（藤田　佑二氏）
・ 東京稲城ロータリークラブ（川島　保之氏）
・ 国際ソロプチミスト稲城（砂塚　有子氏）
・ 稲城青年会議所（椿　克之氏）
・ NPO 法人市民活動サポートセンターいなぎ（角田　享氏）

＜欠席＞稲城市教育委員会（城所　正彦氏）、
稲城市青少年育成地区委員会正副委員長会（石橋　良生氏）

■行政
・事務局４人（企画部長（武藤　路弘）、企画政策課長（杉本　勇人）、
企画政策課計画調整担当係長（宇田　雅彦）、企画政策課主任（井田　聡））

【開会】

委　員　長：本日はお忙しい時間帯にご出席いただきまして、誠にありがとうございます。これより、第２回稲城市海外姉妹都市提携検討市民会議を開催いたします。まずは、事務局より、配布資料の確認をお願いいたします。

宇 田 係 長：配布資料の確認をさせていただきます。お手元に配布させていただいておりますものは、市が用意した資料７点と国際ソロプチミスト様からの資料１点となっております。

① 次第
② 資料１、第１回海外姉妹都市提携検討市民会議
③ 資料２、稲城市の海外交流実績
④ 資料３、「海外姉妹都市とは」と書いてある１枚の資料
⑤ 第１回の議事録（要点記録）
⑥ 名簿
⑦ 座席表

⑧ 国際ソロプチミスト様からご提供いただいた資料
こちらは、傍聴されている方も同じ資料を配布しておりますが、不足の方はいらっしゃいますでしょうか。なお、議事録につきましては、皆さまにご発言の内容をご確認していただきましたので、議事全体の要点記録として整えさせていただいた物でございます。後日、お時間のあるときに、こちらについては、お目通しいただければと思います。以上でございます。

【報告】前回、ご回答できなかった内容等について報告

委　員　長：それでは、議題に入る前に、『前回、ご回答できなかった内容等について報告』ということで、事務局から説明をお願いします。

杉 本 課 長：それでは、前回ご質問のあった内容等を含めご報告いたします。お手元に配布しました資料１に基づいてご説明させていただきます。

まず、資料１の１枚目でございますが、これは平成 27 年 10 月 22 日に開催いたしました１回目の会議の時に、皆さまから率直なご意見いただいた内容について、まとめた内容でございます。まず海外との姉妹都市提携については、多くの委員さんからご賛同のご意見をいただいたということで、全体をまとめさせていただいています。

主なご意見といたしましては、推進的なご意見といたしましては、

・子どもたちに素晴らしい夢の持てる場所を作ってあげたい。
・市民の皆様に歓迎されるような仕組みを作ることができれば。
・積極的に検討すべき。
・スポーツを通じて海外とも市民交流ができるようであれば良い。
・グローバル化の中では、進めていくべきである。
・姉妹都市提携で海外との距離を縮めていけたら。

また、慎重に進めるご意見といたしまして、

・海外との姉妹都市でどのようなことができるかを検討することが必要。
・いろいろな国やまちを調べて一から検討する必要がある。
・稲城市の海外交流の歴史を整理した上で、進めていく必要がある。

というように、皆様からご意見いただいたものをまとめさせていただいております。

続きまして、２ページ目をご覧ください。こちらは、第１回の海外姉妹都市提携検討市民会議の中でご回答できなかった質問の回答をまとめたものです。大きく７点その場でお答えできなかった内容についてまとめさせていただいております。

１番目につきましては、９月補正の議論の内容ということで、ご質問がありました。こちらは、然るべき段階で改めて検討すべきであると、整理させていただいております。

以降２番以降、７番のご質問まで、それぞれの質問に対してご回答としてまとめさせていただきました。事前にお配りしておりますので、後程お読みいただき、何かあれば、お答えをしていきたいと思います。

続きまして３ページの内容は、６番のご質問の中で、以前、教育委員会で海外交流の予算を計上した年が数年続いていたということで、その詳細をということでしたので、内容を調べ、まとめさせていただいたものでございます。教育委員会における海外交流の予算

の内容は、指導課の教育指導に関する経費というものがあり、平成14年度からユージン市教育交流事業交付金ということで,予算を付けさせていただいておりました。これが平成23年まで、名前の方は国際教育交流事業交付金というように変えましたが、このような形で予算を計上し、予算執行をさせていただいております。こちらの内容につきましては、ユージン学園などが、稲城市に訪問された際に、その対応のための経費として執行をしてきており、日本の文化を体験するための教材費や親睦交流の費用に使用してきたということであります。説明は以上でございます。

委　員　長：ただ今、事務局より説明がありましたが、皆さまよろしいでしょうか。

委　　員：資料１の最初の所で、「海外との姉妹都市提携について多くの委員から賛同のご意見をいただいた」と書いてありますが、前回の会議ではフォスターシティ市のこれまでの経緯についてお話があって、それに対する皆様の意見だと思っておりました。そのような中で、姉妹都市全体について、「多くの委員から賛同のご意見をいただいた」というのは曖昧過ぎるので、ここのところは修正又は削除をしていただきたいと考えています。

「多くの委員」というのも曖昧なところがあって、否定的な意見もあったと思います。これが前面に出ていると、いかにもこれで、会議の中で、姉妹都市の提携についてある程度OKが出たというような捉え方になってしまうと思いますので、その辺、皆さんで一回議論をした方が良いと思います。

また、もう一つ、前回に副委員長からご質問がありました今後のスケジュールということについて、今回、その資料が出てくるのかと思っていました。市長さんのご挨拶の中では、年度内である程度話をまとめるという話がありました。その後、副委員長の方からご質問があって、部長さんの方で答えてもらったのは、年度内に関わらず、行っていきたいというところであったので、やはり、今後のスケジュールというところで、この会議が何回あるのか、年度内なのか、年度を跨いで行うのか、その辺を含めて、お示しいただければと思っています。その２点について、よろしくお願いします。

杉 本 課 長：１点目の海外姉妹都市提携の資料については、行政側で、前回の会議の中のまとめということで出させていただいた案ですので、表現を修正するのであれば、この会議の中で、委員の皆さんでご検討いただければと思います。２点目の今後スケジュールについては部長の方からご説明をさせていただきます。

武 藤 部 長：今後のスケジュールにつきましては、前回も私の方からご説明をさせていただきました通り、４回の会議で結論を出すというものではございません。特に、市民会議の皆様のご意見をしっかりとご議論いただいて、その帰着点として、どういうことができるのか、まずは市長がご挨拶をさせていただいた事項について、この会議の中で、結論を出していただくまで、会議を続けていただく必要があると考えておりますので、この年度内で納めるということは考えておりません。ただ、予算の部分が絡みますので、そこの部分につきましては、来年度のことは言えませんが、来年度も引き続いてやる必要が出てくるということであれば、そういった形で進めさせていただくのが、この会議の趣旨と考えています。

委　　員：会議自体は年度内に今日を含めて４回ということですね。「多くの委員からの賛同」というところは、皆様はどう思われているのか、ご意見いただいた方がいいのではないでしょうか。

委　　員：ご発言の趣旨は、この海外との姉妹都市提携云々というとこが、賛同ということで、会議で決まったというニュアンスに取られるというご指摘だと思いますので、主なご意見として、推進的なご意見、慎重に進めるご意見、両論とは言いませんけど、こういう表現ですので、であるならば、「海外との姉妹都市提携については、多くの委員からご意見をいただいた」ということで、『賛同』という文言を削除したらどうですか。ここで結論めいたことを表現するのは、いろいろご意見があるのかなと思いますので、ご発言に対する私の意見です。

委　　員：私も前回の会議は、自己紹介と、個々の意見で終わってしまった会議であったと思います。意見をくださいということでしたので、自分の意見を言いましたが、賛同という結論は出ていないような感じがします。

委 員 長：いかがでしょう。

武藤部長：私どもとしましても、あくまで叩き台としてお出ししましたので、今のご意見を踏まえまして、副委員長のご意見のとおり、『賛同の』という部分は取った形で、この資料を作り直したいと思います。

【議題１】稲城市の今までの海外交流実績について

委 員 長：それでは議題に入らせていただきたいと思います。議題１『稲城市の今までの海外交流実績について』。事務局より説明をお願いします。

杉本課長：それでは資料２をお手元にご用意ください。資料の右上に平成 27 年 11 月 13 日現在ということで、年月日と「必要に応じて修正します」と書かさせていただいております。こちらは、稲城国際交流の会の藤田会長の方とも細かく詰めさせていただいて、作っておりまして、現時点で資料提供としてご説明させていただきたいと思います。また、海外交流を行っている団体からも後ほどお話をいただけることとなっております。

〔資料２に基づいて概略の説明〕

委　　員：ひとつ確認をさせてください。先ほどの資料１の３ページで、ユージン市の予算のことが書いてあるのですけど、使っている年と使っていない年もあります。何に使ったのでしょうか。また、資料２では、交流の実績が書いてない平成 22 年、23 年についても、予算の執行がありますが、これは何に使ったのでしょうか。

杉本課長：今回この予算を調べている中では、平成 14 年からユージン市交流事業交付金という形で、ユージン市から来たときに、日本の文化を体験するための教材費として竹細工の材料費として使ったり、親睦交流の費用に充ててきたということを確認しています。しかし、内訳につきましては、手元に資料がございませんので、今ご報告することはできませんが、その後、平成 21 年のときに「ユージン市等教育交流事業」と、「等」というのが入っているんですけど、この頃には、ユージン市だけではなく、海外の都市が稲城市に訪れた際にユージン市の他に使えるように、「等」というように整理していると確認しています。

その後、ユージン市との繋がりがどういう形になったのか、もっと広い意味で、国際教育交流事業ということで使えるようにと、事業名を変えてきたとうことを確認しています。

平成23年度は、確かにどこの市との交流もなく、何に使ったのかは、今わかりませんので、次回までに調べて報告いたします。

委　員　長：それでは、稲城国際交流の会さん、東京稲城ロータリークラブさん、国際ソロプチミスト稲城さん、稲城青年会議所さんの順でご説明をお願いいたします。その後、意見交換とさせていただきます。なお、皆様、口頭でのご説明とのことですので、ご承知おきをお願いいたします。

委　　員：今、事務局の方から説明がありましたような内容で我々も活動してきたということなのですけど、補足的なことも含めまして、また、重複するところもあると思いますが報告します。

国際交流の会として、過去の交流実績ということで、平成７年に、中国の奥地に稲城というまちがあることを見つけまして、行ってきました。翌年の平成８年には稲城県から３人を招待して、ガーデンシティ多摩などに出ていただいて、大変評判でありました。そして、我々も訪中団を結成して、稲城県を訪問いたしました。4,000mを超える峠を３つも越えて、稲城県の中心は、富士山の頂上と同じくらいの所ですが、自然とか民俗文化が違うため、見るもの聞くこと全て興味深い内容でありました。

平成10年には、稲城県で大洪水があったということを聞いて、会員の個人の出費で義援金を送ったりしました。平成13年には、２次の訪日団を迎えております。そこでは、第１回ふれあいまつりに参加してもらいました。

平成15年には訪中団の派遣計画をしたのですが、ＳＡＲＳの件で１年延期をしまして、平成16年に９名で稲城県を訪問しました。そのときには、政府認可の友好都市にしたいという親書を預かってまいりました。

平成17年には稲城県の副県長、宣伝部長を招待いたしまして、交流の10周年ということで、ｉまつりでチベット族の歌舞の披露なども行いました。

平成20年には第３次の訪中ということで、一般募集で通訳も付けて５名で行きました。このときは、稲城市の全ての小・中学校の児童・生徒の絵を持っていきまして、帰りには向こうからの絵を持って帰ってきて、その後、市民の方に報告をさせていただきました。

中国に稲城県というのがあるということについては、いろんな活動を通して、ある程度定着したのかと思っています。改めて思い返しますと、１次の訪中は、生徒間の友好関係を樹立しよう、教師の間で学習関係の交流をしようという話がございました。ただ、そこでは、中国から、物質的な支援とか資金の援助をお願いできないかという話があり、中身は、貧困の生徒の救援のために資金援助が必要なんだという話がありました。

平成13年の２次の訪中のときは、稲城県の亜丁（ヤーティン）には6,000mを超える山がいくつもあって感激しました。、温泉だとか、チンコウ酒という一種のお酒や、ヤク、チベット族の集会、学校は６７校の小学校等があるとか、民俗舞踊とか、競馬、ファッション関係、マツタケがだいたい年間200ｔ採れ、教育の実態なども見たりしてきました。また、観光の話もしました。

平成16年の２次の訪中団の座談会では、観光として亜丁(ヤーティン)という場所があるのですが、自然豊かな場所で、そこでの開発の話や、マツタケの商売はできないか、というような話がありました。ただ、マツタケについては、かなりその年々、出来具合によっ

て値段が上下するので商売は難しいだろうとの話になりました。また、冬虫夏草、ニンニク、胡椒はどうかなどの話をしました。また、研修生の受け入れ、金銭的な件、文化の解禁についてはどうか、とういうことについても、座談会で話をしました。

それから、平成17年の第３次訪日では、向こうから訪日した人を歓迎するということで、多摩川衛生組合を始め、市内の色んな所を見せてまいりました。日本人は非常に親切で、優しいと言っておりました。稲城県の宣伝部長はその時、稲城県は非常に高地なので、そこから急に日本に来たため、低地病になったということで病院に行ったりもしました。また、教育・環境関係には非常に関心があって、特にお金はいくらくらい掛るのかといったお話もありました。あるいは、文化という点では、日本は、公の場で裸になるのは絶対できない、中国にはそのような習慣はないとか、家庭にミシンがないのは信じられないという話もありました。また、ゴミを分別する行為については非常に興味を持っていました。給料はいくらもらっているのかということで、ボランティアという概念は全くないというような意見もありました。家庭を見て回った時には、日本の家庭には庭があったり、庭木がきれいに剪定されていることについては随分関心を持っていました。

平成20年の３次の訪中のときには、時期が10月頃だということもあり、雪などがありますので、60歳以上の人は気候の良いときにもう一回来てくれというような様々な注文がありましたが、実際には行ってきました。子どもの絵の交換がいいんじゃないかということで、やってきたんですが、その他に、座談会等で、稲城の場合は、産業として梨があると話をしましたら、流通のルートについてはどうするかなどの話しにもなりました。現地から近くはないんですけど、梨の原産地というのが中国の新疆（しんきょう）ウイグルのコルラというところを中心としてあり、いろんなところから梨を実際に我々が食べて、かつ、その梨の種を稲城に持って帰って植えました。それは何かと言いますと、梨農家にとって、受粉作業といいますか、そういったものとか、後継者の問題とか、それからもう一つは、気候の温暖化によって、どう将来が変わってくるかとか、そういった部分について話をしています。それから、日本から交換留学と言いますか、そういうことをやるにはどうしたらいいかということで、飛行場から何キロくらいの所だったら日本のジャイカのお金を使えるのかについてなど、議論をしております。

ユージン学園の件については、先ほどもお話にありましたように、ユージン市は掛川市と姉妹都市提携をしているんですけど、個人的なつながりがあり、教育委員会と教育姉妹都市提携をしたということを聞いています。あとは、お互いに交流をしたりしており、国際交流の会も、その中に入って協力をしたということです。

バーモント州については、国際交流の会の役員が、現地のベンさんとのつながりで、歌の友好大使ということで、派遣いたしました。実行委員会を組織して、平成５年には訪日、平成６年には訪米、平成19年には13年ぶりにたまたま向こうからやってきたというような形です。

その他の活動もありますけど、主に国際交流の会としては、そういった形でいままでの交流をやってきたということで報告といたします。

委　員　長：ありがとうございました。

委　　員：補足で、私の姉妹都市についての考えというか、一つの提案です。フォスターシティ市が

ダメだということでは全くありませんけど、もう一度スタートから考え直すという意味で、私の考え方を述べさせていただきます。グローバルの世界で生きていける人間を育てるというのが、姉妹都市を結ぶ一つのメリットと思います。今、攻めの商売をやるためのノウハウというのが非常に求められています。あるいは、チャレンジする人を作りたいというために、そのツールとして姉妹都市・友好都市を結ぶのが一番いいと思っています。もっと言いますと、衛生状態が悪いとか、環境が厳しいとか、あるいは遅れているとか、そういうことを言っていたら、実は何もできないんじゃないかなと思います。もっと言うと、たくましい人間を育てるために、こういったことを使うのが一番いいのかなと。今の就職試験でも、外国人と日本人がいたら、外国人を採用したいというケースがだんだん増えてきている。そういった中で、ノウハウも得られるというのは、市民に対しても姉妹都市のメリットとして言えるのではないかと思います。商売にしても、将来、死に物狂いでやっていかないと生きていけないようになるんじゃないかと思います。私は姉妹都市の件についても研究してきたんですが、いろんな市町村で海外姉妹都市をやっていて、非常によかったという意見を聞いてはいます。例えば、周りばっかり気にするんじゃなくて、たくましい人間を育てるためにはどうしたらいいかということで、例えば１年留学をさせる、帰ってきたときには全く違った人間になって、たくましく育って帰ってきて、非常に効果があったという話をよく聞きます。そういったことに利用できれば、いいんじゃないかなと思っています。

今、一つの提案といたしまして、前回皆さんの意見を聞いたのですが、海外とはどういうところか、もっとよく知る必要があるんじゃないかなと、私個人は思っております。姉妹都市というのは、歴史を見てみますと、1970 年に長崎とセントポールが提携したのが日本で最初で、それからいろいろなところが、いろんなことをやっていますけども、それがどんな活動をしているのか、どういう経緯で姉妹都市が結ばれたのか、そして、現在はどんな状況なのか、市民にどういう風に受け入れられているのか、というようなことを、できればこういう皆で集まる会議じゃなくて、分科会みたいな形で、４～５人で一つのグループで何かをまとめて、それを全体会議の中で発表するというような形でやると、実際に姉妹都市というのはどういうものかというのが、もっと分かるんじゃないかと思います。もっと勉強する必要があるんじゃないかと思います。一つの提案としてお話しました。

委　員　長：ありがとうございました。続きまして、東京稲城ロータリークラブさんの海外交流実績をお願いします。

委　　員：先日も一部話をしましたので重複するところがあると思います、ご承知おきください。ロータリークラブは大きく分けて、高校生を中心にしたホームステイ等を行う事業と、大学生に向けて資金面、日本に留学している優秀な方たちに対して資金援助という形の二つがあります。稲城の場合は、数年に一度くらい、順番なんですがやらさせていただいています。

まず、高校生の場合は、ホームステイを中心に考えていて、期間は約１年、だいたい 11 ヵ月くらいですが、場所はアメリカ、メキシコ、ドイツ、ブラジルなどとなっています。ロータリークラブは世界 2,750 地区ということで、その中でさらに 100 くらいのロータリークラブがございまして、だいたい 10 クラブぐらいでグループになり、稲城の場合は、

府中、稲城、調布、狛江、多摩で、ホームステイに来る方を回しているところです。私が、10数年ロータリーに入っている間に、アメリカから２人、ブラジルから１人いらっしゃいました。高校生の方なので、どこかの高校に預かってもらわないといけませんので、女性の方だったため３人は駒澤学園さんにお願いして預かっていただきました。ホームステイは１つの家でずっと預かるのはなかなか難しいので、会員さんを中心に、だいたい１ヵ月から３か月くらいご自宅に預かっていただくというやり方をしてまいりました。もちろん、日本からも送り出していまして、これが結構厳しく、夏前に説明会がありまして、200人くらいの高校生が集まります。基本的には、日本から送り出す場合には高校２年生、または３年生です。アメリカ合衆国だけは、TOEICが500点か600点か、ある程度英語ができないと、向こうのロータリーさんは引き受けてくれないということがありました。他の国ですと、メキシコ、ドイツ、ブラジルなどがあり、基本的には日本もその国の子どもを預かります。だいたい８月か９月にはそこに行ける子どもたちを選考します。それで、行きたい国は、基本的には選べません。選ばれた子は、それから約半年間かけて、その国の語学とか歴史とかを勉強させて、半年後に送り出していると聞いています。行き先がメキシコとか、ブラジルとかあるわけですが、ちゃんと、その言葉をある程度わかるように、日本にいる間にスキームとして、最低限、歴史的なものも覚えさせて送り出して約１年間行ってきます。何で一年後かというと、向こうの多くの勉強は秋から始まるというのが多いので、それに併せてやっていると聞いています。

それから次に、大学生の方は、米山基金とかいろいろなロータリーの基金がございます。最近だと、コーディネーターとして担当を決めましてメンバーに１年間くっ付いていました。韓国から首都大学に来ている方で、お金的な支援は１年なんですけど、実際は２年間くらい人的支援的なものをしたと思います。基本的にはロータリーは週１回集まりがありまして、月１回、意見交換をして、近況とか、何を勉強しているか、そういうことを話していただきました。その関係で、金銭支援をしています。金額を言うと結構びっくりするくらい出しています。それ以外にも、大学生に関しては、色んな形の支援の仕方があります。ただ、そのお金の援助については、アジアの方たちが多く、なかなか欧米の方にはいっていないというのが現状です。大変簡単ですが以上でございます。

委　員　長：ありがとうございました。続きまして国際ソロプチミスト稲城さん、お願いします。

委　　員：私どもは、海外の事業を始めて20年になります。最初に始めたのは1995年で、稲城四中の１年生と３年生が、海外派遣に行きました。1996年には、桐光学園と、稲城五中の生徒さんたちが行っております。稲城在住か、稲城の学校に通っているかということで募集しておりますが、1997年には、帝京学園高等学校３年生と、昇華学園中学校の２年生。それから1999年には桐光学園中学２年生、関東国際高等学校２年生が。2000年には石川学園中学校２年生と都立北多摩高等学校の２年生。2002年には都立神代高等学校２年生と稲城第五中学校の３年生、多摩大学付属聖ヶ丘中学校２年生。2004年には、稲城第四中学校２年生、東京学芸大学付属高等学校１年生。2006年には、早稲田実業学校中等部の３年生。2008は都立調布南高等学校３年生、松陽高等学校の１年生、2010年には、いろいろ社会的事情があったのかもしれませんが、申し込み者がございませんでしたので、ゼロです。2012年には、2010年がいなかったせいか、大勢の方が応募して下さいまして、そのときは、５名

の方に行っていただきました。稲城第５中学校１年生、稲城第６中学校２年生、私立第一高等学校１年生、立教女子学院１年生、私立創価中学校２年生。2014 年は、私立桐朋女子高等学校１年生、創価高等学校１年生、桐光学園高等学校１年生。

だいたい隔年で２名ずつくらい、私どもで補助金を出しておりまして、国際交流の会の方のように直接お世話をできるわけではないので、今日資料をお配りした、ユートレックというところに、20 年前の 1995 年のときから、お世話になっております。このプログラムを読んでいただくとわかるんですが、とても私たちも信頼の置けるところでございます。

ホームステイを受入して下さる方たちは、全て 100%ボランティアでやってくださっております。各家庭で受け入れるのは一人ということで、何故一人になるのかということも資料に書いてございますが、私たちの目的に沿ったところだなということで、20 年前からお願いしております。ともかく、青少年の育成事業ということで、続けておりまして、大勢の青少年の方が、日本の若い大使として、海外にホームステイするということは、生活環境や文化、習慣、ものの考え方、言葉の違いなど、国際的感覚が学べる素晴らしい機会だと思っています。今年度もまた、１月の広報で募集させていただきますが、夏も予定していますので、なるべくたくさんの方が応募してくださるといいと思います。

行き先なのですが、古いところは調べ上げることができなかったのですが、2012 年の５名の方は、アメリカのユタ州２人、ワシントン州１人、オレゴン州２人、2014 年はオレゴン州に行ってまいりました。

世界情勢がこんな状態なので、今年の募集もどうしようかと気にかかるところなのですが、ユートレックにお電話で相談してみましたら、今どこか安全というのが言えない時代ですが、行き先がそれほど繁華街ではなく、田舎の方になるとのことでしたので、一応、計画通り、進めてまいりたいと思っております。

委　員　長：ありがとうございました。続きまして、稲城青年会議所さん、お願いいたします。

委　　員：私たちは、国際交流というほどのものでもないのかなと思うのですが、本年度、東京の方で、国際アカデミーというものが行われたのと、先日、金沢の方で世界会議が開かれましたので、そちらのことをお話させていただきます。まず、国際アカデミーとは、何かというところなんですけど、ホームページの引用でご説明させていただきます。「1987 年公認プログラムとして、国際青年会議所 JCI に認定を受けて以来、27 回の国際アカデミーを日本 JC 主催のもと日本全国で開催し、約 3,000 名のグローバルネットワーカー国際アカデミー卒業者を輩出してきました。その時々の日本 JC のテーマと開催地青年会議所のテーマを取り入れながら、世界各国から集まる若者たち同士の相互理解を深め、明日のグローバルリーダーを育て、恒久的かつ永久の世界平和確立に貢献すべく開催されてきました。」ということで、JCI という国際青年会議所といった形で、世界中に青年会議所があるんですけど、そちらの次世代のリーダーを目指す方たちを集めて日本でアカデミーを開くというようなものであります。それが今年の７月５日から１０日間、東京都の２３区及び近隣で、開催されました。その設営の委員会の委員として私たち稲城青年会議所から２名が出向して、こちらの国際アカデミーの設営の準備をさせていただきました。その際に、海外の留学生デリゲイツと私は読んでいるんですけど、日本に来た初日の宿泊の受け入れ、ホストファミリーとして会員にエストニアから来た女性の方の宿泊先として受け入れて

いただき、その当日は、ホストファミリーがエスコートして都内の観光案内をしたりしました。その夜には、稲城青年会議所の有志として歓迎会というような形で、懇親会の席を設けさせていただいて、交流を図りました。私自身は英語を喋れないんですが、何人か英語をしゃべれるメンバーがいましたので、そちらの何人かによって、歓談をして、その翌日からは国際アカデミーということで、宿泊施設の方で、研修を受けて頂きました。

その後、世界会議というものを先日 11 月３日から８日まで行われておりました、こちらの世界会議について概要がわかるものがネットのニュースでありましたので、一読させていただきます。「国際青年会議所（ＪＣＩ）の世界会議金沢大会が３日金沢市で始まった。ＪＣＩは 132 の国と地域にある青年会議所を束ねる非営利の国際会議、日本での開催は５年振りで政令指定都市以外では初開催となる。今回の会議では 103 の国と地域から約 8,000 人が参加し、９月の国連総会で貧困の根絶や、ジェンダーの平等を盛り込んで採択された持続可能な開発目標を達成する方策などを話し合った。石川総合スポーツセンターであった開会式には、秋篠宮家の長女眞子さまが臨席した。「今、金沢は、木々色づく美しい季節、魚介類や農産物を含む豊かな食文化を楽しむことができます。金沢での滞在が思い出に残ることを祈念します」と述べたニュースなんですが、こういった世界中からメンバーが集まって、当日は金沢は、外国人だらけ、普段から金沢は観光地なので、結構海外からいらしているんですけど、それとは色合いの違った外国人の方々が多く見えられていました。その中から、稲城のメンバーとしても、６名世界会議の方に参加させて頂いて、それぞれセミナーであったり、フォーラムに参加して、いろいろな世界で行われていることを学んでまいりました。そして、夜には、また、国際アカデミーで稲城に来ていただいたエストニアの女性と、そのフィアンセ、そのご子息で 13 歳の男の子と一緒に、懇親の席を設けまして、その他にも東京の青年会議所のメンバー何人かと、稲城では珍しく、我々が懇親会を開くと、どうしても 10 名に満たない人数になってしまうのですが、珍しく人数多い中で、国際色豊かな懇親会を開くことが出来ました。そういったようなことで、私の所管としては、今まで私が入会して、2010 年に入会したんですけど、その間、あまり国際的なイベントに参加する空気はあまりなかったんですけど、今年に入って、今まで世界会議に参加するのは一人くらいかなと思っていたのですが、本年度は６名のメンバーが参加したりと、だいぶ国際的なものに目が向くような形になってきたので、そういった中での、今回の姉妹都市提携の話ということで、だいぶ稲城青年会議所的には国際交流の風が吹き始めたのかなと思っています。以上になります。

委　員　長：ありがとうございました。それでは説明が終わりました、。何かここで、ご意見等ございましたら伺いたいと思います。いかがでしょうか。

委　　員：国際交流の会さんにお伺いしたいのですが、稲城県との交流で、平成 16 年に、先方から稲城市長宛てに友好都市についての親書をもらったとのことなのですが、この時に稲城としては返信をしなかったということですが、ということは、ここでもう、稲城としては切れたという形なんでしょうか。要するに、友好都市関係を結ぶこと自体をそこで中断しているような形になってしまって、そのままマツタケ業者が行ったときに、いい話をいただけなかったということなのでしょうか。

委　　員：切れているということはないと思っています。中国の人民政府といいますか共産党の担

当者も転勤とかで２年くらいで代わっています。親書については、返事は一応書いたんです。それは、お金の問題とか、その他のこともあって、「ちょっとそれは協力できません。市の方にも話をし、こちらの方での対応も検討していますのでいずれまた然るべき時期が来たら」というような形になっています。要は、待ってくれと、対応できるようになったらまた、というような形で収めています。

委　　員：チベット族の歌舞の披露と書いてありますけど、チベットということは新疆（しんきょう）とか、騒動のある場所になるんですかね。

委　　員：新疆とチベットは全く違います。チベット族はチベット自治省の他、四川省、雲南省、青海省、甘粛省それにインドやネパールブータンなどにも住んでいます。

委　　員：４人の方にお話しをいただいて、既にかなり国際交流をされているということは十分理解できました。それから藤田さんの方から、環境面とか、衛生面とか、そんなことを言っていれば友好都市・姉妹都市なんて結べないよという話があったのですが、私も、非常に同じ意見でございます。行った人間が非常にたくましくなって帰ってくるというのは、自分の息子もそういう経験をしてきたものですから、目の当たりに見て、すごいなと感じています。

　ご発表いただいた４人の方にお聞きしたいのですが、既に、友好都市・姉妹都市を結ばなくても、交流はやっているよ、やれる人はやれるよ。姉妹都市がなくても勝手に行ける人は行っちゃうよ、というご意見なのか、それとも、市で姉妹都市をちゃんと結んでくれて行きやすい環境、特に小学生とか中学生とか小さいときから行きやすい環境を整えてもらうなど、是非友好都市をやってもらいたいというご意見なのかお話しいただきたい。どういうご意見なのか、現に海外交流をやられている４人の方から、是非やってもらいたいというご意見なのかお話しいただきたいと思います。

委　　員：私は、実際にその場に行ったことで思ったのが、私は全く英語がしゃべれないので、懇親会の席で話しかけれても、ただ笑っているだけという状態で、やっぱり、英語をやっておけば良かったなということを思いました。そういった思いで、もし、自分が子どもの頃にそういった環境があればもうちょっと違っていたんではないかと正直思ったので、できることなら、こういった環境が作れるんであれば、今の子供たちには作ってあげた方が良いなと思っています。

委　　員：私も、同様でございまして、中高生を対象とした海外派遣を 20 年間やってきているんですけど、やはり姉妹都市になれば、小さい方からお年寄りまでみんなが交流できるんじゃないかなと思います。先ほども、前回の会議でも申し上げましたが、たった１ヵ月間の留学ですが、やっぱり行く前と帰って来てから、すごく子供たちは変わるんですね。そういう面では、早くから、そういう体験をさせてあげたいなという感じです。

委　　員：高校生のホームステイは１年近く行くので、本当にガラッと変わって帰ってきます。やっぱりその国のファンになって帰ってくる子が多いと思います。自分の３人の子どものうち２人は、短期ですけど学校でホームステイに行きました。上の子の場合は少し変わっていて、オーストリラリアだったんですけど、一人ずつ３週間くらい全くわからない人たちのところにホームステイをしていしました。下の子の場合は、学校で行って、学校の延長のような形でカナダに３週間程度行ったのですが、学校の先生も付いて行っているので、そ

れが本当に留学であるのかという疑問はありましたけど、現地で生活する経験ができたのはいいのかなと思っていますし、少しは変わって帰ってきたのかなと思います。

それから、ロータリークラブではボランティアでホームステイさせるのですが、全体の部分では相当大きなお金が動いています。日本全体では、本当に、大勢を受け入れていて、毎年何十人単位とか、世界中から受け入れるという形でやっています。相手の国がどこかということは、その時々の人間関係などの部分があると思いますが、まあ、基本的には、悪いことではないと思うのですが、金銭的な部分を、例えばこのメンバーさんで負うのはなかなか厳しいのかなと思います。あくまでもこれは行政が主催の検討会ですから、ある程度は、行政も将来的には何らかのことをやらないと、結局、何回かは交流が続くけれども、どっかで止まってしまうのではないかと思います。

やはり最低限、どこかからご支援がないと結構厳しいと思います。あと、期間をどれくらいにするということや、これは先の話だというんですけど、将来的には組織を作ってやるんだと思うんですけど、経済的な部分もよく考えていただかないと、なかなか厳しい話になってくると思います。海外姉妹都市については賛成です。

委　　員：国際交流の会として、友好都市とか姉妹都市を結ぶという前提ではなく、実施してきた交流の実績について先ほどお聞きしたんですけど、やはり、交流をやっている時に、やはり姉妹都市であれば良かったなとお感じになったというのは結構ございましたか。その辺を私はものすごく知りたい。今までの経験上、姉妹都市を結んだ方が絶対いいよねというようなことがあるのか、ご意見としていただければと思います。

委　　員：生きていくすべを学ぶということについての機会という点では非常にあると思います。国際交流の会の活動も、最終的な目標の１つとして、姉妹都市を結ぶことも含めて活動をしてきました。また、将来への投資というような考えの中で、そういう環境の中に置いてあげたい、そういう機会を設けてあげたいというのは、一つの投資だと思うんですね。そして、投資した以上の物は得られると一応考えています。どういうような内容の友好都市、姉妹都市を結ぶか、結局は、我々が何を望んで、どういう事をして欲しいかということになると思います。金額的な案件も、お金の出し方も千差万別です。

稲城県の件について、中国の考え方は、ボランティアという考えは基本的にはありませんでした。今は世界でボランティア活動があるということで、少しは受け入れられてきたと思いますけど、我々が接した限りでは、行政同士が必ず対等に話をするんだ、という形だったと思います。

アメリカの場合は、フォスターシティ市の場合もそうでしょうし、ある意味ではボランティアが発達してきていますので、ボランティアに任せる形で、そこにお金を援助することはできますけど、基本的な考え方はボランティアが独立して対応する。このように、アメリカと中国の場合は、実際に姉妹都市を結ぶ場合でも、やり方は違っていると思います。

委　　員：やはりグローバルな視野とか考え方とか、そういう人を今から育てないとなかなか厳しいというご意見は、私も 38 年間外資系の企業にいましので、非常に感じるところでございます。

委　　員：余談になりますけど、外国から日本に来てもらう場合、どうせお金は一定の金額しか出せないのであれば、稲城に来てもらいたい人に来てもらいたい。その事は裏を返して言えば

優秀な人間にどうやってきてもらえるか。インドのような国は人が多いだけに優秀な人も多く、来てもらえる可能性もあります。何もしなければ何も変わりません。迷惑で困るような人には来てもらいたくありません。勝手なことを言いますが。いかにして日本にとってためになるような人材を連れてくるかというのが企業でも非常に必要としている内容だと思います。

委　　員：ご発表いただいた４方のお話を聞いている限りですと、もう国際交流の部分はかなり貢献している方もいらっしゃるのかなと感じますし、ここであえて稲城市が姉妹都市を結ぶ必要はないのかなと思いました。これだけ一生懸命やっていらっしゃるのだから、この方々に一生懸命やっていただければいいのかなと少し思うんですけど。

また、次の議題に関係するのかもしれませんが、提携の在り方という部分で、やはり何が目的でやるのかというと、そこの部分を整理しないといけないのかなと思います。国内の場合は、先日の相馬市、野沢温泉村へは私たちも訪問させていただいて、そこの教育、産業などを見させていただいたわけですけど、海外になると、語学交流、そういう部分だけしかないとなれば、この４名の方々が本当に一生懸命やっていくれている部分にお金を出した方がいいのかなと思います。

最終的に、交流する意味というのがどういうものなのかを、稲城市がしっかり整理してくれれば、そこでまた少し私たちも考えなきゃないけないのかなと思います。

委　　員：姉妹都市というのは除いたとしても、国際交流とかそういうものは本当に必要なんだなとは思っています。一か月くらい前なのですが、職場の方に文部科学省から通知が来ておりまして、そちらの題名が「訪日教育旅行の円滑な受け入れ促進について」ということで、平成 27 年 10 月５日付なんですけど、その中で、外国の若者に日本の魅力を知ってもらうと同時に、日本の児童・生徒の国際理解を深める訪日教育旅行を円滑に受け入れ促進する為、政府は観光立国実現に向けたアクションプログラム 2015、平成２７年６月５日観光立国推進閣僚会議決定及び日本大綱戦略 2015 未来への挑戦において、2015 年までにおいて、訪日教育旅行の受入者数を 2013 年の４万人から５割増しとする新たな目標を掲げました」ということで、これは、稲城に学生とかが来たときに、そういう受入先を作ってくださいということです。そういうことで、園の中でも、もう少し職員向けに英語教育ですとか、そういうことを含めて、話をしました。ロータリークラブとしても、カウンセラーの役割を行った中で、いろいろ問題という部分が見えてきて、自分の中での経験としましては、やっぱりホームステイとして２ヵ月や３か月間、学生さんを受け入れること、それが一番大変だったと言う思いがあります。もちろん、その中でのお金という部分や、また、まだ 10 代ということですので、ホームシックにかかるような時期もありますし、そういう対応ということで、カウンセラーという役割もやりました。

このように、いろんな問題もあると分かっている中で、これからやっぱり外国の人とやらさせていただく上では、各団体だけでは、もちろん団体の上部組織の中から補助金とかいろいろもらって運営してきている部分はあるんですけど、やはり、受け入れるとしても限界があります。例えばロータリークラブでは数年に１名程度しか受け入れることができません。

姉妹都市という部分では、いろいろ交流ができ、教育だけではなく、産業とか、観光と

か、いろんな部分があると思いますので、その可能性を考えると、やはり組織でやるべきなのかなと思います。相手の場所というところは、後になると思いますが、そういう時期なのかなと思います。

委　　員：私も皆さんのお話を聞いて、国際交流の会や方やソロプチミストの方たちも、交流をしているので、素晴らしいな思うのと、そのままでも交流を続けられているということに、良かったなと思います。

　姉妹都市として、もっと子ども達を海外に送り出すということ、また、向こうの子ども達を受け入れるということには、すごく大賛成なんですね。向こうに行った子供がすごく変わって帰ってくるというのは、野沢温泉村の４泊５日でもそうですし、親から離れて帰ってきたときに、ちょっと変わって帰ってくるというのは良く分かります。特に海外との交流、どこの国というのではなく、得る物はすごくたくさんあると思います。どこに決まるかはわかりませんけど、稲城市としては、何人送り出すかや、金銭的な補助というのも考えながら進めて行けたらと思います。

委　　員：国際化とか、そういったグローバルな視点を持った子ども達の育成のことは皆さん相違はないと思いますが、じゃあフォスターシティと姉妹都市を結びましたという時には、すぐに子ども達を行かせるかと言ったら、僕が親だったら行かせないです。向こうの受け入れ先もまだはっきりしていなくて、向こうの町との交流もないのに、いきなりお金を出してそこに行かせるというのは、今の所考えられないかなと思います。ですから、その辺は、話をごっちゃにしてはいけないのかなと思います。ＰＴＡ代表の方もいらっしゃいますけど、ちょっとその辺の話が、まとまるような話だったらいいとは思うんですけど、いきなり提携して、じゃあ行きましょうというのでは、なかなか普通の人はお金を出して行かないのが現実かなと。まあ、現実的に無理だなという感じはしています。ただ、交流をしていくというのは、大賛成ではあるんですけど、姉妹都市になったからといって、すぐに行くというのは現実的にはおかしい話であると思いました。以上です。

委　　員：国際交流として、子ども達の交換留学とか、受け入れとかは大賛成なんですけど、姉妹都市を結ぶとすると、選択肢が増えるというか、自分たちで探さなくても一つ選択肢となると思うので、何処に決まるかは別として、どこかと結ぶことは賛成です。

委　　員：稲城国際交流の会の歴史ということで稲城県の交流のお話をいただいたのですけど、その当時私は事務局長でして、窓口もやっていました。今日、ご発表あったように、いろいろな交流があったと思うんですが、それぞれの団体さん、例えば、ロータリーさんでも世界組織の動きもあるでしょうし、ソロプチさんもソロプチさんの組織の動きがあると思います。いざ、海外と自分たちで交流をやるとなると、事務的なことを直接全部をやらなきゃいけないので、そういう風な組織体制を組むというのは人的なことや、予算的な物とかは、相当な労力がかかるという感じがします。それで、何人かご指摘有りましたけれど、否定はしないにしても、何を具体的にしていくのか、姉妹都市になれば、稲城市にとって、どういうメリットがあるかということなどが市をあげて構築されないとなかなか評価はいただけないのかなという感じはします。特に、国内から海外となると、それだけでハードルが高くなりますから、その辺は整理整頓をして臨まないといけないと思います。ただ、個人的な印象としては、どこの都市かというのは、きっかけ論というのはいろいろあると

思うんですね。ある例では、海外の方が飛行機に乗っていたら、フウテンの寅さんを見て、「この町がいい」と言って、その話がきっかけとなったという話も聞いてますし、またある自治体では、自分たちで、自分たちの自治体が世界のどこの都市と姉妹都市をしたらいいのかということを検討し、ヨーロッパはどうか、オセアニアはどうかとそんな調査をして決めたなんて話も聞いたことがあります。ですから、きっかけはいろんなきっかけがあるのかなという気がします。ただ、結論としては、私の印象としては、自治体は、市をあげて、どういう形態の交流ができるのかというのを組み立てるのが一番肝心な所なのかなという気はします。個人的な意見です。

委　員　長：これで、意見は出尽くしたことと思います。私もロータリーとＪＣの両方で、世界大会とかの海外交流に何度も出たことがありますし、交換留学生もやっておりますが、この交換留学生とか世界大会とそういうイベントとは違いまして、シスターシティ、姉妹都市というのは、また別物なのかなと、という風に、今皆さんの意見を聞きながら考えさせていただきました。何らかのきっかけができて、稲城との繋がりがあるところに、安心して行けるような、道しるべを作るのが、ここにいる皆さんなのかなと言う風に思います。そのためにはもっともっといろいろお話をして、ちょっと煮詰めていきたいな、という風に感じています。

【議題２】海外姉妹都市提携の在り方について

委　員　長：続きまして、議題２『海外姉妹都市提携の在り方について』事務局より説明をお願いします。

杉 本 課 長：それでは資料３の方をお手元にご用意ください。こちらの資料につきましては、基本的にインターネットや書物の中に書かれている内容で、「海外姉妹都市提携とは」ということと、「海外姉妹都市と交流する意味とは」ということで、基本的な内容を行政としてご提示させていただきます。一つのたたき台ですので、今後、海外姉妹都市提携とはどういうものか、交流する意味だとかを市民会議の中でご議論していただくための参考にしていただければと思います。

〔資料３の説明〕

これを一つの参考にしていただいて、ご意見の方をいただければと思います。よろしくお願いいたします。

委　員　長：ただいま事務局より説明がありましたが、皆さまのご意見をお伺いしたいと思います。なお、先ほど各団体の取り組んできた活動についてご説明をいただきましたが、その活動がどういう意義や目的でやっていたのかなども含めて、お聞かせいただければと思います。

委　　員：自治会連合会を代表して来ていますので、そのご意見を話したいと思います。かなり大きな団体ですので、この会議が発足するにあたり、各役員さんの自治会の方々、いろいろな方々にお話しを聞いたりしたところ、いろんな意見がありました。やはり、フォスターシティ市はどこなのというのが一つ大きなところがありまして、あと、新聞で読んだという人もいましたし、それから、何故、そのことに関して、市民代表者が視察に行かなきゃい

けないのか、知らないところになんで行かなきゃいけないのか、もちろんそういったご意見もございました。会議自体をするのはいいのですけど、海外と交流するのはいいけど、やはり市民代表者が何故すぐに行かなきゃいけないの、そういう意見が多々ありました。そういう中で、先ほども申し上げましたが、海外都市と交流していくのは良いことだと思いますし、個人的には反対はしないんですけど、ただ、ここですぐに姉妹都市を提携して、それ有りきで何かを始めるというのは、市民感情的にはあまり賛成できないです。また、それに予算を付けて何かをやるというのは、なんとなく、今の段階では、考えられないんじゃないかと思います。あやふやな予算を付けて、それを何のためにやるかも分からないのに予算を付けるというのは、もちろんここは予算を決定する場や要求する場ではないので、偉そうなことは言えないのですが、年度末に来ておりますので、その辺の話も、皆さん、市民の人からご意見が出てきてますので、私は自治会連合会を代表し申し上げるのと、やはり、もう一つ、予算を付けるのだったら、この市民代表者の会議の視察の予算を付けるのではなくて、子ども達だったり、留学に意欲的な学生さん、そういった人たちに付けるべきであって、この会議の代表者が行くっていうのには否定的な意見が多くあったところでございます。以上です。

委　員　長：他にいかがでしょうか。

委　　員：在り方という部分に係ると思いますが、たぶん姉妹都市提携をして何ができるのかということかと思います。私は、芸文連の方から出ていますが、そういう意味では、茶道、華道、書道、そのようなものがございます。その他にも、陶芸もございますし、そういうもので交流することができれば、より有意義な姉妹都市を結べるんじゃないかと思います。先ほどから出ているように、一番は人を育てる教育だということは全く賛成ですが、やっぱり交流していく上では、姉妹都市を結ぶことで、我々の文化を向こうに伝えることは十分できると思います。歴史が高々何百年じゃなくて、我々はやっぱり千年二千年というものを持っていますので、そういう文化を伝える機会になればいいなと思います。

委　員　長：私も商工会という立場でお話しします。先ほど、ソロプチミストさんのお話でご紹介のあったユートレックから、２年前に、「高校生や大学生を職場に留学させたい、給料はいりません、日本の事業所を見せていただきたい。」という申出をいただいたことがあります。しかし、余りにも話が急だったので、お受けできませんと、１年くらい前にお話しをしていただければ受け入れましょうとお話をさせていただきました。我々商工会の中で、今一番危惧しているのは、人口の減少です。頼るのは移民です。海外の方に来ていただいて、労働力になってもらう。今、出生率が下がっていますから、これはどうしようもないことですから、どうするかというと、海外の方を入れるしかない。もしくは、事業所を海外に移すか。そういうところもあり、やはり、日本より全然遅れている海外の人達が、勉強したいという形で、非常に多いのが現状です。そういうことを踏まえて、先ほども言ったんですけど、交換留学生と、姉妹都市は全く別物であるのかなと思います。私はＪＣも20年近くやって、ロータリーも20年近くやって、今感じている所であります。そうしたことで、そうした情報を皆さんも持っていましたら、聞かせていただきたいと思います。

委　　員：やはりいろいろ話を伺っていますと、こういう海外との交流というのの難しさというのもあるんですけど、ここにあるような提携する意味としては、お互いの文化を知るとか、経

済交流、それからスポーツ交流、あとは青少年が主になると思うのですが、やはり、先ほど皆さん仰ったように、グローバル社会の中で、国際社会に出て行かなきゃならない時代の中では、青少年がもっと、海外に飛び出す機会を作れたらいいなという風に思っています。ただ、先ほど、副委員長からもお話有りましたが、交流する時のきっかけがどこにあるかで、決まっていくと思うんです。いろいろな事を言っていきますと、結果的には、曖昧なままこの会議は終わってしまうのではないかとも思います。もし、そのきっかけを掴むのでしたら、今回、このようなきっかけがあったのですから、そういうものを考えながらいけば、この中で会合も進んでいくんじゃないかと思います。

委　員　長：貴重なご意見ありがとうございました。だいたい、皆さんのご意見も、今日の所は伺えたのかなと思うのですが、いろいろこれから、この会議というのは、先ほどいろいろ出ておりますけれど、予算とかそういうことではなく、要は、次世代の子ども達に何をしてあげられるのか、仕組み作りができるのかというところをしっかり、この後、皆さまとお話をさせていただくことで、今後の方向性も出てくるのかなと思っています。

【議題３】次会の開催について

委　員　長：議題３『次回の開催について』。事務局より説明をお願いします。

宇 田 係 長：次回、第３回の会議は、12 月 17 日（木）午後７時から、地域振興プラザの中・小会議室で開催を予定しております。議題につきましては、

(1) 海外姉妹都市提携を希望している海外の都市について

※自治体国際化協会が提供する資料を提供予定

(2) 海外姉妹都市との交流について

※交流についての方法論、交流事業の内容、課題などを検討

を、予定しております。後日、改めて開催通知をお送りさせていただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

杉 本 課 長：いろいろご議論いただきまして、ありがとうございました。特に最後の議題の２の方につきまして、在り方については、次回の交流についての部分にも絡む部分もありますので、今日のご意見を含めて、いろいろなご意見をいただきながら、この会議の中でまとめていただければなと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

また、交流事業の方法論、事業の内容などについても、大変申し訳ないのですが具体的に「こういうものがあるんじゃないか」ということが、もし時間の許す限りお調べいただき、その中でご提案していただければと思います。どこの都市とかではなく、まずは海外との交流を進めるのであれば、どんなことができるのかということをご議論していただければと思いますので、よろしくお願いいたします。

委　員　長：ありがとうございました。何かご質問はございますでしょうか。

ないようですので、それでは、これで第２回稲城市海外姉妹都市提携検討市民会議を終了いたします。